

LIVE: JUN SKY WALKER(S) 1995.6.14 渋谷公会堂

JUN SKY WALKER(S) のライブを最後に見たのが1989年11月24日で、その頃にはライブが全然楽しくなくなって、CDが新しく出てもう買わなくなっていたから、5年半近くまったくJUN SKY WALKER(S) を聴いていなかった。だけど、「ロックンロールに関しては、なんとなく聴きつづけたりもしませんし、なんとなく聴かなくなるということもしませんから、きっぱり聴かなくなりますから、岡田さんのおっしゃるとおり、ブルーハーツに決別したといえますね。でもいくら決別するといっても、耳や心を塞いでしまうわけではないのです。ブルーハーツがよい音楽をやっていたら、ライブにいかなくても、アルバムを買わなくても、それはききとどこからか届いてくると信じているのです」と、2年前のチラシ(1995.6.25号)に書いたとおり届いてきたのだ。それはJUN SKY WALKER(S) でブルーハーツじゃなかったけれど、(ブルーハーツはあ

のとき決別して以来、耳も心も塞いでいなかったのに、とうとうなにも届いてこないまま解散だった) そうなのだ、ライブにいかなくても、アルバムを買わなくても、よい音楽をやっていたらそれはききとどこからか届いてくるのだ。3月に大槻ケンヂのソロアルバム「ONLY YOU」を買ったときは、そのなかにJUN SKY WALKER(S) の森純太がギターを弾いている曲が入っているなんて全然知らなかったから、1曲目の「オンリー・ユー」にはものすごく心がゆさぶられた。「オンリー・ユー」を聴くと涙があふれて止まらなくなる。それは、もちろんいちばんには大槻ケンヂのヴォーカルがすばらしいからなのだけど、97号(1995.6.11発行)に書いたように、森純太の「7年も8年も前に好きだった頃のJUN SKY WALKER(S) を思い出させる郷愁いまますぐなギターの音色」のせいも多いにある。それに、「オンリーユー 君は僕の すぎさった 夢の一つ オンリーユー 君のこと 忘れない いつまでも」という歌詞に、自分勝手な思い入れをして泣けて泣けて……。

で、もう何年もライブにいないし、CDも全然聴いてないし、ベースがオリジナルメンバーの伊藤毅に変わっていたし、いまのJUN SKY WALKER(S) がどんなふうになっているのかまったくわからないけれど、「オンリー・ユー」で弾いているようなギターが聴けるなら、それだけでもいいからライブにしてみよう! って決めた。発売開始日にチケットを買ったのに2階の真ん中の席。ふーん、人気あるんだ。

ライブ当日、開演時間まぎわに入ったが、開演が遅れ、そのあいだ会場にブルーハーツやアンジーやスタークラブなどが小さく流れていた。大槻ケンヂの「オンリー・ユー」が流れてきたときには「あー、うれしいな」って、思わず聴き入ってしまった。「オンリー・ユー」が終わったとたんに客席が暗くなり、すっかり忘れていたキャーという歓声が会場いっぱいひびいて、ライブがはじまった。

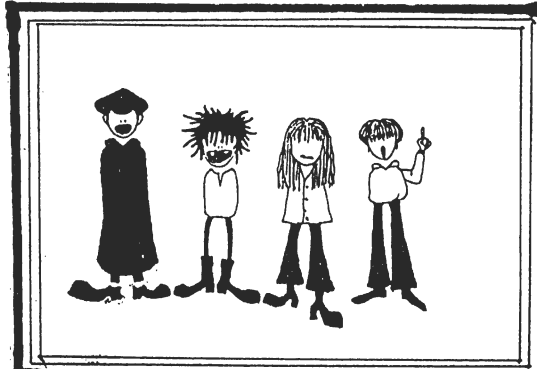
JUN SKY WALKER(S) はタフなロックンロールバンドになっていた。正確にはロックンロールギターバンドっていった方がいいかもしれない。それくらいギターがよかった。「オンリー・ユー」のギターだけをてがかりに來たけれど、正解だった。「そうだ、こんなんだ」って思い出すようなところもすこしはあったけれど、ほとんどはじめて聴くのに等しかった。5年たっただけのことはある。幅も厚みも格段に増して、迷いがまったく感じられない力強さ。ギター、精進してんだ……。

ヴォーカルの宮田和弥の歌詞は以前のような独特のひねった言葉の転回、私は「歌詞のバック転」っていついたんだけど、それが好きだったんだけど、それがなくなって、ストレートに走るって感じのものに変わっていた。心の深いところに落ちてこないで、サーッと来てサーッと行ってしまふような、他の人でも書けそうだって思わせる歌詞なんだけれど、よくのびるていねいな歌い方には好感もてたから、ま、いいか。相変わらず演奏の合間によくしゃべって、話の内容もどうってことないけど、それも、ま、いいか。うん? ちょっと点数甘いんじゃない? って思いながら聴いているうちに、最新のCDにも入っていない新曲だとう「愛しい人よ」というバラードになって、そも歌詞には目をみはった。「君が僕を卒業した日」、「君の顔を思い出すと あの日にどってしまふから 振り返らないと誓った 遠い遠い夜」、「いつかまた会える日まで 君の青春忘れないで 君が僕を卒業しても」という歌詞を、JUN SKY WALKER(S) と私との交わらなかつたこの5年半のこととして聴いていた。つまらない郷愁(自分で勝手にそう思い込んでいただけなのかもしれないけれど)にひたるのがいやで振り返らなかつた年月のあとに、こうしてまた会えてよかったって目がうるんだ。だから、森純太とドラムの小林雅之が1曲づつ歌った歌もファンサービスなんだらうから、大甘の、ま、いいか、ということにした。ライブの終わりのほうにやった「すてきな夜空」とアンコールの最後にやった「マイ・ジェネレーション」だけが聴いたことのある曲で、あー、そうだ、こういうのが好きだったんだということや、以前のライブのことを思い出したりしたけれども、それはナツメロという感じではなかつた。現在のJUN SKY WALKER(S) のなかでちゃんと生きている曲になっていた。

ライブの2、3曲目でJUN SKY WALKER(S) はタフなロックンロールバンドになっていたって思ったけれど、ライブが終わったときそれをもっと強く確信していた。

LIVE: 眼球駆楽舞 1995.6.18 高円寺GEAR

1995.6.29 下北沢 屋根裏



チラシのイラスト。かわいらしく描いてあるけど作業はスゴイよ。左から小嶋茂(1) 山川ひでろう(2) 恩田アキコ(3) キムラジュンコ(4)

眼球駆楽舞の「トカゲ」という歌(詩: 山川ひでろう)のなかに「俺は爬虫類だ 殻破り 舌を世界にまきつけて 殻破り 俺は爬虫類だ」というところがあるが、この歌ができたばかりの今年の1月、ひでろう自身が「新曲「トカゲ」で殻を破る」ということを歌っているけれども、これまでいっつも殻を破ってきたけれども、今回のはそういうレベルじゃない大きなものを破った」と語ったとおり、ひでろうは大きく変化した。ひでろうの詩(ひでろうの場合、歌詞というより詩である)にある唯一無比という独自性、ほんとうに感じたままを書いているという純粋性、それはまったく変わらずにあるのだが、以前はその詩がひでろうの皮膚感覚として伝わってきたのだが、いまはあきらかに骨格を感じさせる。そして、今回の2回のライブで実感したいちばんの変化は、それまではひでろうのバックバンドのようだったのが眼球駆楽舞という4人のバンドになったということである。ギター、ベース、ドラムがそれぞれぐうっと立ちあがってヴォーカルとからみ、それにひでろうの弾くアコースティックギターが加わって、ステージに大きな渦が巻きおこる。その渦のなかに舌を世界にまきつけたトカゲがいる……。

高村は、今日は朝早く起きて、ジョイスの日記を覗きました。ぼくはこの小説が好きです。そこにはいろいろな人が出てきますが、一人一人がぼくの知っている叔父さんや叔母さんや、ぼくの町の誰かに似ています。ぼくの家は小さなアパートでしたが、ピアノがありました。ときどき、三宅の家に集まる人たちのように、ぼくの家にも父の知り合いや叔父さん叔母さんたちが集まり、ピアノを弾いて歌うたびに、三宅の「D」が風邪をひいて少ししか歌えなかった歌のことを考えます。The Less Antheimという歌をぼくは知りませんが、ドアの向こうからもれてきたその歌を、Gabrielと一緒にぼくも聞いたような気分になります。小説の中では、それは悲しい歌だということですが、世界もこの悲しい歌がみんな美しい旋律をもっているとは思えないことですが、「神の火」上巻 P.287)

高村は最後までコンサートを聴けなかった。ドンナ・アンナの有名なアリア、Non midir, De' i'oi! Mio が終わったとき、「腹減って死にそうだ」と江口に声をかけ、外事の刑事二人に目で見えただけで、ホールを出た。たしかに腹も減っていたし、「北」がずっと自分を狙っていたという江口の話や、外事警察の類りなさに衝撃を受け、混乱していた、しかしそれよりも、この世に生まれられた幾多の美しい旋律の中で、最も美しいもの一つを聴いたために、耐えられなくなったのだ。「世界じゅうの悲しい歌がみんな美しい旋律をもっているとは思えないことですが」と手紙に書いていた良の言葉を、いや、パーヴェル・アレクセーイェヴィッチのことを思い出して、「そうだね、そして、美しい歌がみな悲しいのは、なぜだろう」と独りごちながら高村はタクシーを拾えるホテルの車寄せへ歩いた。(同下巻 P.10)

1年半くらい前、週刊文春の「仕事場探検隊」というグラビアで高村薫という作家をはじめ知った。フープロだかコンピュターだかわからないが、それしか置いていないデスクの前に、椅子にあらをかがいて、どちらかといえどきつ表面情でカメラのほうを向いている姿と、短いコメントで印象的だ「高村薫」という名前が頭に残った。それからいろいろお話を聞いた。出てくるのは「三枝」と「三枝」と「三枝」と書いてあるのは、文春の写真とはちがって小柄で楚楚とした女の人のだ。このインタビューの中で高村薫の言っていることは説得力があつて「読んでみたい」と思った。

「照柿」、「神の火」、「マークスの山」を読んだ。どの作品も高村薫が言っているとおりに登場する人物一人一人が、肉体を持っていて、「読後に塊みたいなものが胸にスシンと残る」と、とくに「神の火」には選き通るほどの哀しい美しさが胸にスシンと残る。

高村: というか、登場する人物一人一人がちゃんと、肉体を持っていないやいけな。これを作り出す作業が小説の仕事の大きな部分だと思ふんで、それに時間がかかるんです。ストーリーをつくるのは簡単なんです。

三枝: あ、そうですね。でも、推理小説というのは、誰が犯人で、どう結んでいく、ストーリーの組み立てがいちばんのポイントじゃないんですか。

高村: 私は三年前まで一般読者だったから分るんですけど、読者が買わないのは、要するに、読んで面白くない本なんです。ジャンルはあまり関係ないんです。では、何が面白くないかというと、単にトリックがどうのという、それだけでひびくとしたら面白くないと思う読者もいるかもしれない。私は、それだけじゃなく、三枝: トリックだけではね。

高村: トリックが素晴らしいという読者の方もいらっしゃいます。それはそれでいいんですけど、私は一読者として、そういう本は敬遠したし、何かこう、読後に塊みたいなものが胸にスシンと残るような小説を求めていたから、私も書き手になった時に、そういう作品を書いていきたいなど、もちろん筋も大事ですけど。

三枝のホンマでっかー! 週刊読者(1995.6.25号)より

BOOK: 高村薫著「神の火」 (上下巻 新潮文庫)